広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	梁陳の「折楊柳」 : 「攀折」の「折楊柳」
Author(s)	佐藤, 大志
Citation	中國中世文學研究 , 60 : 25 - 47
Issue Date	2012-03-27
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051436
Right	
Relation	

梁陳の「折楊柳」―「攀折」の「折楊柳」―

佐藤大志

一　「折楊柳」はどのように読まれてきたか
―問題の所在―

唐詩には「折楊柳」という曲がしばしば登場する。例えば、李白「春夜洛城聞笛」の「此夜曲中聞折柳、何人不起故園情」（此の夜曲中折柳を聞く、何人か故園の情を起こさざらん）、王之渙「涼州詞二首」其一の「羌笛何須怨楊柳、春光不度玉門関」（羌笛　何ぞ須ひん　楊柳を怨むを、春光　度らず　玉門関）などは、その代表的な例である。

この「折楊柳」という曲は、送別の席において、旅人へのはなむけとして、柳の枝を折って贈るという、所謂「折柳贈別」の習俗に基づくものとされる。そして、この「折柳贈別」の習俗が文献上確認できるのは、漢人の著作と伝えられる『三輔黄図』の次の記事からである。

『三輔黄図』巻六「橋」（増訂漢魏叢書本）
霸橋　在長安東、跨水作橋。漢人送客至此橋、折柳贈別。王莽時、霸橋災、数千人以水沃救不滅。更霸橋為長存橋。

増田清秀氏の指摘に拠れば、清の孫星衍・荘達吉は『三輔黄図』を校定した際に、「漢人」から「折柳贈別」までの十一字、すなわち「折柳贈別」が漢代から行われていたことを示す記事を、後世の人が妄りに加えたものだとして削去している。[1] 増田氏は、孫星衍・荘達吉の校定を支持し、「新曲の「折楊柳」が作られた梁・陳以前の時代に、「折柳贈別」が行われたという事實を引證できる資料が、何一つ見當らない」とし、また梁陳以前、楊柳を手折って別離を傷む作例はなく、それが漢代の風俗だと後世の人が意識して作辞しはじめるのは、南朝の時代からと憶測するしかないとする。

また許曼麗氏は、『楽府詩集』所収の「折楊柳」とその類題の作品を漢代から梁陳まで分析したうえで、梁代から楊柳がしばしば別離詩に不可欠な景物として登場し、梁陳の横吹曲「折楊柳」から離別との関係が顕著となること、「楊柳の枝を手折る」ことの意味づけは、漢代の俗習よりも、民間の風習に使われる楊柳の占い性、男女間の情愛の証としての役割のほうが、詩人にとって、より

説得的、より刺激的ではなかったかと言う。[2]

許論文は、「折柳贈別」の生成についての言及はないが、いずれにしても、日本に於いては「折楊贈別」は梁陳の頃には定着したと現在では考えられている。[3]

これに対して、戴明璽氏は「覇橋折柳」は地方の習俗であり、この地方習俗の「折柳贈別」と詩歌の「折楊柳」とは初めは結びついておらず、詩歌の「折楊柳」は隋唐以前は離別と関係が無く、「折楊柳」の内容は多様であったことを指摘する。そして、それが一つの主題へと転換するのが梁代の「折楊柳」からであり、隋唐以後に「折楊柳」は離別を表すものとなることを指摘する。更に「折楊柳」には「折柳贈別」と「折柳寄遠」との二つがあり、隋唐、特に唐代の「折楊柳」の典型はむしろ「折柳寄遠」であり、この「折楊寄遠」は「折柳贈別」から派生した新しいものだと指摘する。[4]

唐代の「折楊柳」の作例はむしろ「折柳寄遠」のほうが多いことは、戴論文の指摘する通りであり、「折楊柳」の作例を「折柳贈別」と「折柳寄遠」とに区別して論じる戴論文には学ぶところが多い。しかし、『三輔黄図』の「覇橋折柳」の一文に対する疑いがないところ、また「折柳贈別」が先であり、「折柳寄遠」が派生義とするところには疑問が残る。

稿者の調査に拠れば、六朝から唐代までの「折楊柳」及び「折柳」を詠む詩は、むしろ「折柳寄遠」が先であり、「折柳贈別」が後に登場する。そして、「折柳贈別」が広く用いられ、詩のモチーフとして定着していくのは中晩唐以降と考えられる。[5]

また隋唐以後の「折楊柳」は、「寄遠」「贈別」の二つだけではなく、さらに多様なモチーフがあり、各時代、各詩人によって、古いモチーフがくり返されたり、また新たなモチーフが生みだされたりしていく中で、再生と創造がくり返されていく。

更に梁陳以前に目を向ければ、「折楊柳」には「寄遠」「贈別」のほかに、「望郷」の「折楊柳」があり、それもまた隋唐以後の「折楊柳」へと継承されている。

本稿では、まず隋唐より前の「折楊柳」、特に「折楊柳」が離別の歌として歌われ始めた梁陳の詩を中心に、「折楊柳」という行為が、当時の詩人たちによってどのように意味づけられていったのか、そしてそれは梁陳以前のどのような文脈から生まれたものなのかということを、できるかぎりたどってみたい。

なお、これ以後本稿に引用する詩のテキストは、特に言及しない場合は、いずれも逯欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』を用いる。

二　梁陳の「折楊柳」（一）
―「望郷」の「折楊柳」―

郭茂倩『楽府詩集』には、巻三十七の相和歌辞に「折楊柳行」として、古辞・魏文帝・陸機・謝霊運二首を収録し、巻二十二の横吹曲辞に「折楊柳」として、梁元帝・

梁簡文帝[6]・劉邈・陳後主二首・岑之敬・徐陵・張正見・王瑳・江総、そして唐の盧照鄰・沈佺期・喬知之・劉憲・崔湜・韋承慶・欧陽瑾・張祜・張九齢・余延寿・李白・孟郊二首・李端・翁綬を収録する。また巻二十五の横吹曲辞・梁鼓角横吹曲には「折楊柳歌辞」五曲と「折楊柳枝歌」四曲、巻四十九の清商曲辞には「月節折楊柳歌」十三首が収録されている。

このうち、相和歌辞の「折楊柳行」は「折楊柳」という楽府題と内容との間に特に関連性を見出すことはできず、またそれぞれの作品の主題も異なっている。恐らく歌辞の内容よりも、楽曲の曲調に従って、又は楽曲をイメージして、それぞれが歌辞を作成したものだろうと考えられる。

これに対して、横吹曲辞の「折楊柳」は、いずれの作例も離別を主題とし、また作品中に「楊柳を折る」という行為やそれに類する行為が詠み込まれており、「折楊柳」という楽府題に即して、歌辞が作成されている。

このように相和歌辞の「折楊柳行」と横吹曲辞の「折楊柳」との間には断層があり、隋唐以後の「折楊柳」が離別を主題とするのは、梁・陳の横吹曲辞の「折楊柳」に由来するとと考えられる。

そこで本稿もまず梁陳の横吹曲の「折楊柳」(以後、本稿では梁陳の「折楊柳」と呼ぶ)の作例から検討をはじめ、その内容と特徴を明らかにしておきたい。

『楽府詩集』が、梁陳の「折楊柳」の最初の作例として掲げるのは、梁元帝であり、その次が梁簡文帝である。『玉台新詠』巻七は、梁簡文帝の「折楊柳」を「和湘東王横吹曲三首」の一首とし、これを「湘東王」すなわち梁元帝蕭繹の横吹曲に唱和したものとする。「和湘東王横吹曲三首」の他の二首は「紫騮馬」と「洛陽道」であり、現存する梁元帝の「紫騮馬」「洛陽道」と比較すると、主題や語彙などが両者に共通しており、『楽府詩集』が収録する梁元帝の「折楊柳」と梁簡文帝の「折楊柳」も、前者を原唱として、後者がこれに唱和したものと考えられる。

王宜瑗氏は、横吹曲を中心に梁陳の征戦詩を分析し、梁陳の征戦詩におけるテーマ上の大転換として、征人思婦型が出現したことを指摘する。[7]「折楊柳」も男性の立場から詠むものと、女性の立場から詠むものの二つがあり、その中で梁元帝と梁簡文帝の「折楊柳」はいずれも男性の立場から詠まれたものである。

まず梁元帝の「折楊柳」は巫山巫峡を行く「遊子」がその地の楊柳を見て、故郷のことを思い出し、望郷の念に駆られるというものである。

折楊柳　　梁元帝

巫山巫峡長　巫山　巫峡　長く
垂柳復垂楊　垂柳　復た　垂楊
同心且同折　心を同じくして且つ折るを同じくす

故人懐故郷　故人　故郷を懐ふ
山似蓮花艶　山は蓮花の艶の似し
流如明月光　流は明月の光の如し
寒夜猿声徹　寒夜　猿声　徹り
遊子涙霑裳　遊子　涙　裳を霑す

第三句の「同心且同折」は、「同心」のものと楊柳を折り、それを送別の時に贈られたこと、すなわち「折柳贈別」に類する行為を示す早い時期の例とも指摘される句である。[8] ただ詩中には楊柳が手折ったのが送別の場であったのか、またそれが送別の場で旅立つ者へのはなむけとして贈られたのかどうかは、明確にされていない。ここでは、異郷の楊柳を見た「故人[9]／遊子」が、かつて心を同じくした人物とともに楊柳を手折ったことを思い出し、それが彼を望郷の思いに駆り立てる要因となっていることを確認しておきたい。

次の梁簡文帝「折楊柳」もまた男性の立場から詠まれたものであるが、その男性は旅人ではなく、従軍の兵士となっている。

折楊柳　　梁簡文帝
楊柳乱成絲　楊柳　乱れて糸を成す
攀折上春時　攀折す　上春の時
葉密鳥飛礙　葉密にして　鳥の飛ぶこと礙げられ
風軽花落遅　風軽くして　花落つること遅し
城高短簫発　城高くして　短簫発り
林空画角悲　林空しくして　画角悲し
曲中無別意　曲中に別意無く
併是為相思　併びに是れ相思を為す

冒頭の「楊柳乱成絲」は、沈約「春詠詩」に「楊柳乱如糸、綺羅不自持」（楊柳　乱るること糸の如し、綺羅自ら持せず）とあり、また梁元帝「春別応令詩四首」其三に「門前楊柳乱如糸、直置佳人不自持」（門前の楊柳乱るること糸の如し、直置　佳人自ら持せず）とあり、春の楊柳と思い乱れる女性とを重ね合わせた表現として用いられている。

しかし、五・六句の「短簫」「画角」は本来軍楽や軍中に用いられる楽器であり、「城高」とは従軍の兵士が守備する辺城、「林空」はその周辺の状況を言うのであろう。後述するように、梁陳の「折楊柳」は、従軍の兵士の立場から詠まれるものが多く、梁簡文帝の「折楊柳」は梁元帝が男性の立場から詠むのに唱和して、その設定を旅人から辺境を守備する兵士へと設定を変更したものであろう。

兵士は、辺城で春を迎え、楊柳を見て心を乱され、その枝を「攀折」する。この「攀折」という語は、後の「折楊柳」の作例に於いてもくり返し用いられる語であり、ここでは故郷を思う兵士の切ない思いが込められた行為として読める。辺城の周辺で「短簫」「画角」によって奏

でられる曲は、すべて愛する人を思う曲であり、故郷を思う兵士たちの切ない思いを、この詩は描こうとしている。

そして、次の陳後主「折楊柳二首」其二もまた、従軍の兵士が望郷の思いに駆られて、楊柳を「攀折」する姿を描く。

折楊柳二首　其二　　陳後主

長條黄復緑　長條　黄復た緑
垂糸密且繁　垂糸　密にして且つ繁し
花落幽人径　花は落つ　幽人の径
歩隠将軍屯　歩は隠る　将軍の屯
谷暗宵鉦響　谷暗くして　宵鉦響き
風高夜笛喧　風高くして　夜笛喧し
聊持暫攀折　聊か持して暫く攀折し
空足憶中園　空しく中園を憶ふを足たす

三句目の「幽人」は、遠方の人[10]であり、ここでは故郷を遠く離れて従軍する兵士を言う。第四句はその兵士が将軍の軍隊に従軍していることを言うのであろう。夜には暗い谷間に行軍の鉦の音が響き渡り、笛の音が風に乗って盛んに奏でられるのが聞こえる。そのような状況のなか、兵士は故郷の「中園」への思いを満たそうと、楊柳の枝を「攀折」する。第六句の「夜笛」によって奏でられる曲は不明だが、梁簡文帝「折楊柳」の言う「相思」の曲が、ここでも想起される。

また、次の岑之敬の「折楊柳」では、そのような従軍兵士の「相思」の曲、すなわち「折楊柳」の曲が生まれるのが、楊柳を「攀折」する場であると言う。

折楊柳　　岑之敬

将軍始見知　将軍　始め知らるるに
細柳繞営垂　細柳　営を繞りて垂る
懸糸拂城転　懸糸　城を拂ひて転じ
飛絮上宮吹　飛絮　上宮に吹く
塞門交度葉　塞門　度葉　交はり
谷口暗横枝　谷口　横枝　暗し
曲成攀折処[11]　曲は成る　攀折の処
唯言怨別離　唯だ言ふ　別離を怨むと

冒頭四句は、兵士が故郷を出発する時の春の情景を描く。男性が故郷を出発する時の春の情景を「楊柳」の姿を以て表現するのは、『詩経』小雅「采薇」の「昔我往矣、楊柳依依」（昔我往きしに、楊柳依依たり）に基づくものであり、別離の時を象徴する景として、六朝詩にしばしば用いられるモチーフである。兵士が将軍に初めて知られて出発するとき、軍営の周りには楊柳が茂り、その枝は城壁にかかり、風に吹かれて柳絮は上宮まで舞い上がっていた。

後半四句は一転して、故郷を離れた後の状況が描かれ

る。「塞門」「谷口」の句は、遠征地で春を迎えた兵士が見た楊柳の姿であり、兵士はそれを見て故郷を出発した時のことを思い起こす。そして望郷の思いに駆られた兵士が楊柳の枝を攀折する時に、別離の怨みが託された「折楊柳」の曲は生まれると言う。

そしてこの従軍の兵士の「攀折」と「折楊柳」の曲との関係は、陳・祖孫登の「詠柳詩」にも見える。

詠柳詩　　祖孫登

…　　…

高葉臨胡塞　　高葉　胡塞に臨み

長枝払漢宮　　長枝　漢宮を払ふ

欲験傷攀折　　攀折を傷むを験(ため)さんと欲せば

三春横笛中　　三春　横笛の中

この詩は「胡塞」と「漢宮」とあるように、従軍の兵士と都長安の女性とが見ている楊柳を対比的に描いており、楊柳を「攀折」するのは男女両方であると読むほうが良いであろう。彼／彼女が楊柳を「攀折」する思いを知りたいのであれば、春の横笛の曲、すなわち「折楊柳」の曲をお聴きなさいと言うのである。

このように楊柳を「攀折」する行為は、従軍の兵士の望郷の思い、またその兵士を思う女性の思いが託された行為とされ、またその思いが「折楊柳」という曲には託されている。

更に、次の江総「折楊柳」も従軍の兵士の「望郷」の思いを描いたものと考えられる。

折楊柳　　江総

万里音塵絶　　万里　音塵　絶え

千條楊柳結　　千條　楊柳　結ぶ

不悟倡園花　　悟らず　倡園の花の

遙同羌嶺雪　　遙(とほ)く羌嶺の雪と同じなるを

春心自浩蕩　　春心　自ら浩蕩し

春樹聊攀折　　春樹　聊か攀折す

共此依依情　　此の依依たる情を共にするも

無奈年年別　　年年の別れを奈(いかん)ともする無し

故郷は万里の彼方にあり、遠く隔てられて音信も絶え[12]、いま千條の楊柳が柳絮を結ぶ時期となった。「倡園」は女性の居る故郷の庭園。後に引く陳後主「折楊柳」二首其一にも「楊柳動春情、倡園妾屧驚」(楊柳　春情を動(しばし)かし、倡園　妾屧ば驚く)」とある。「倡園」の花は、第二句の「千條楊柳結」と関連づければ、ここでは柳絮のことを指すのであろう。いま辺境も春を迎えて柳絮が飛ぶ時期となった。それを見た従軍の兵士は、羌嶺に降り積もる雪が、かつて見た故園の柳絮と同じであることに気づいて、故郷への思いに駆られるのである。

「春心」は、宋玉「招魂」に「目極千里兮、傷春心」(目は千里を極めて、春心を傷ましむ)とあり、王逸の

注に「言湖沢博平、春時草短、望見千里、令人愁思而傷心也」(言ふこころは湖沢博く平らかにして、春時草短く、千里を望見すれば、人をして愁思し心を傷ましむなり)とあることを踏まえて、異郷の地に在って傷み悲しむ春の心を言う。

兵士の心は春を迎えて激しく揺り動かされ、「春樹」すなわち楊柳の枝を「攀折」する。「共此依依情」は解しがたいが、先の『詩経』小雅「采薇」を踏まえて、楊柳の「依依」たる姿と、故郷への思慕の念[13]とを重ね合わせ、楊柳を「攀折」して、その「依依」たる思いを楊柳と共有しようとしたということではなかろうか。しかし、長い年月にわたる別離の悲哀は解消することはできず、兵士は望郷の思いを募らせる。

このように、梁陳の「折楊柳」には遠く故郷を離れた男性が、故郷への切ない思いを込めて楊柳を「攀折」するというモチーフがくり返し用いられていることが分かる。そして、梁陳の「折楊柳」の作例は、むしろこの「望郷」の「折楊柳」のほうが多く、「閨怨」の折楊柳のほうが少ないのである。

三　梁陳の「折楊柳」(二)
―「閨怨」の「折楊柳」―

『楽府詩集』巻二十二横吹曲辞において、梁元帝と梁簡文帝の次に挙げられるのは、劉邈の「折楊柳」である。劉邈は侯景に仕えた人物であり、台城攻略に手こずる侯景に和睦を勧めたことが『梁書』侯景伝に見える以外、目立った事跡は残されていない。また逯欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』は彼の詩をこの詩を含めて四首収録するのみである。この劉邈の「折楊柳」は、梁元帝と梁簡文帝とは異なり、男性との長い別離を思って柳の枝を折る女性の立場から詠まれたものである。

折楊柳　　劉邈

高楼十載別　　高楼　十載の別れ
楊柳擢糸枝　　楊柳　糸枝を擢(ぬき)んず
摘葉驚開駃　　葉を摘みては　開くことの駃(はや)きに驚き
攀條恨久離　　條を攀(ひ)きては　久しき離(わか)れを恨む
年年阻音息　　年年　音息　阻(へだ)たれ
月月減容儀　　月月　容儀を減ず
春来誰不望　　春の来たりて　誰か望まざらん
相思君自知　　相思ふこと　君自ら知らん

作中に設定されるのは、男性との十年もの長き別れを思う高楼の女性である。彼女は、柳の葉を摘んでは時の推移に驚き、柳の枝をひき折って長い別れに思いを募らせる。「攀條」は「古詩十九首」其九の「攀條折其栄、将以遺所思」(條を攀きて其の栄を折り、将に以て思ふ所に遺(おく)る)を踏まえたものであり、遠く思う人に枝をひき折って贈る「折柳寄遠」を想起させる語である。

男性からは長い間消息も無く、女性の容貌は次第に衰

えてゆく。自分のこの思いを知っているであろうに、と男性を詰る女性のことばで、この詩は結ばれている。

これは明らかに「閨怨」の女性の立場から詠まれたものであり、前節までの梁陳の「折楊柳」とは、その設定を異にする。『玉台新詠』巻八では、この劉邈の「折楊柳」を「鼓吹曲　折楊柳」と題す。増田氏はこれを梁陳の人々が横吹曲と鼓吹曲を混同していた例として挙げており、[14]『玉台新詠』の題名に特別な意味を読みとることはできないのかもしれないが、梁元帝と梁簡文帝及びそれ以後の「折楊柳」と劉邈の「折楊柳」にはその設定に隔たりがある。

また梁陳の「折楊柳」には他に、王瑳「折楊柳」も遠く別離した男性を思う女性を描く。

折楊柳　　王瑳

塞外無春色　　塞外　春色無く
上林柳已黄　　上林　柳已に黄なり
枝影侵雲暗　　枝の影は　雲を侵して暗く
葉彩乱星光　　葉の彩は　星を乱して光く
陌頭蔵戯鳥　　陌頭　戯鳥を蔵し
楼上掩新妝　　楼上　新妝に掩はる
攀折思為贈　　攀折して贈と為さんことを思ふも
心期別路長　　心期　別路長し

この詩は、冒頭に男性の居る辺境の地（「塞外」）と女性の居る都長安（「上林」）とを対比的に描き出す。辺境には春はまだ訪れていないのに、長安はすでに楊柳が黄金色の花をつけて春を告げ、枝は宮殿を覆うように茂り、葉は夜空の星を背景としてきらめいている。「陌頭」は、男女交会の場であり、また男女の別離を想起させる場でもある。ここでは「戯鳥を蔵し」とあり、前者の場として男女が仲睦まじく戯れることを暗示しているのであろう。[15]このように都は春を迎えて、「楼上」では女性たちが美しく着飾って春を楽しもうとしている。そのような楽しげな春の日に、愛する人が辺境の地に征ったまま帰らず、女性は独り愁いを抱え、楊柳の枝を「攀折」する。そして、それをまだ春の訪れない辺境の地に贈ろうと思うのだが、愛する人（「心期」）との距離は遠い。

王瑳の「折楊柳」が、その他の梁陳の「折楊柳」とは異なる特徴の一つは、第一句に「塞外無春色」と、辺境は春の訪れが遅いことを言うところであろう。これは劉宋・陸凱の有名な「贈范曄詩」の「折花逢駅使、寄与隴頭人。江南無所有、聊贈一枝春」（花を折りて駅使に逢ひ、隴頭の人に寄与す。江南　有る所無く、聊か贈る　一枝の春）に見られるような、春の訪れの遅い北方の地に江南の春を贈るというモチーフからその発想を借りたものであろう。

王瑳は、陳後主が皇太子の頃からその文学集団に属し、陳後主が即位した後も、日々禁中で宴席に陪席し、孔範・陳暄らとともに「狎客」と呼ばれた人物である。[16]前節で

述べたように、陳後主の「攀折」は、「望郷」の思いを抱く男性の行為であった。また、同じく陳後主の皇太子時代の文学集団に属していた岑之敬の「攀折」も、故郷を思う従軍兵士の行為である。陳後主、岑之敬、王瑳の「折楊柳」が同時期に作られたものか、それとも全く別々に作られたものかは定かではなく、王瑳の「折楊柳」だけが、なぜその設定を異にするのかは分からない。しかし、従軍の兵士とその兵士を思う女性の、所謂「辺塞」と「閨怨」とは相互に関連しあうものであり、劉邈や王瑳のような「閨怨」の「折楊柳」と、前節で示した「望郷」の「折楊柳」は表裏一体の関係にある。

そして、次節に掲げる陳後主の「折楊柳二首」其一と徐陵の「折楊柳」は、王瑳の「折楊柳」と同じように、従軍の兵士とその兵士を思う女性の姿を対比的に描きだそうとしており、更にそこには、二つの「折楊柳」の曲が登場する。

四　南と北の「折楊柳」

―「江陵有旧曲、洛下作新声」―

陳後主「折楊柳」は二首あり、先に示した其二は従軍の兵士の立場から詠まれたものであったが、其一は前半は女性の立場から、後半は男性の立場から詠まれている。

折楊柳二首　其一　　陳後主

楊柳動春情　　楊柳　春情を動かし
倡園妾屧驚　　倡園　妾は屧(しぢ)ば驚く
入楼含粉色　　楼に入りて　粉色を含み
依風雑管声　　風に依りて　管声を雑(まじ)ふ
武昌識新種　　武昌には　新種を識り
官渡有残生　　官渡には　残生有り
還将出塞曲　　還(ま)た出塞の曲と
仍共胡笳鳴　　仍(しば)ば胡笳の鳴を共にす

まず前半四句は、楊柳に「春情」すなわち春の思いを引き起こされる「倡園」の女性を描く。彼女たちは高楼で化粧を施し、風に乗せて笛の音を奏でる。「管声」とは「折楊柳」が鼓吹曲又は横吹曲であることからすれば、ここで奏でられるのは「折楊柳」の曲ではないかと想像される。

後半は柳にまつわる「武昌」と「官渡」の故事を挙げる。「武昌識新種」は、かつて陶侃が軍営に柳を植えさせたところ、都尉の夏施が武昌郡西門に植えられた柳を盗み、後に陶侃がそのことに気づいたので、皆はその明察を讃えたという故事による。[17]「官渡有残生」は、魏文帝が建安五年の袁紹との官渡の戦いの時に彼の地に柳を植え、十五年の後に再び「官渡」を訪れてかつての柳を見て時の推移に感じたという故事による。[18] いずれも軍隊に関わる楊柳の故事であり、結びの二句はこの故事を受けて、「折楊柳」の曲が、辺境の地で出塞の曲とともに、胡笳によって演奏されることを言う。

このように陳後主の「折楊柳二首」其一は、前半では倡園の女性の「折楊柳」を、後半では従軍の兵士の「折楊柳」を詠んでいる。そして、これと同じように、女性と男性とを対比的に描きつつ、結びでは「閨怨」の女性の怨みを述べるのが、徐陵「折楊柳」である。

折楊柳　　徐陵

嫋嫋河堤樹　嫋嫋たり　河堤の樹
依依魏主営　依依たり　魏主の営
江陵有旧曲　江陵には　旧曲有り
洛下作新声　洛下には　新声を作す
妾對長楊苑　妾は対す　長楊の苑
君登高柳城　君は登る　高柳の城
春還応共見　春還りなば応に共に見るべきも
蕩子太無情　蕩子　太(はなは)だ情無し

徐陵の「折楊柳」は、まず「河堤樹」と「魏主営」とを対比させる。「河堤」は女性が居る黄河のほとりを、「魏主営」は、先の魏文帝の「官渡」の故事を踏まえて、兵士が従軍する場を示す。女性と男性はそれぞれ「長楊苑」と「高柳城」におり、女性は「嫋嫋」たる楊柳を見て従軍する男性を思い、男性は「依依」たる楊柳を見て城壁に登り、故郷を思うのであろう。

「長楊苑」は、もと秦の宮殿で、漢代に修復された「長楊宮」のこと。「高柳城」は、漢の代郡高柳県に属する城であり、漢代には匈奴との国境に近い地であった。「官渡」とは全く別の場所であるが、ここは「楊」「柳」の入った宮殿名と地名とを対置することによって、都長安にいる女性と辺境に従軍する兵士との関係を示しているのであろう。

このように、徐陵「折楊柳」は都長安の女性と辺境に従軍する兵士の姿を対比的に描きながら、結びには男性が春になっても帰って来ないことを恨む女性の思いが述べられている。

この徐陵「折楊柳」で、その意味が解しがたいのが、第三句・第四句の「江陵有旧曲、洛下作新声」である。先の陳後主「折楊柳二首」其二が「武昌」と「官渡」にまつわる楊柳の故事を踏まえるように、ここも「楊柳」または「折楊柳」にまつわる故事を踏まえていると考えられる。

許逸民氏は、「江陵」の句は梁元帝の「折楊柳」を指し、「洛下」の句は庾信の「楊柳歌」を指すとする。[19] 庾信は梁朝において徐陵と共に仕え、のちに庾信は東魏に使いして、江陵陥落後は長安に留まり、北周に仕えて洛州刺史となった。「洛下」（洛陽城下）とは、庾信が北周に仕えて洛州刺史となったことによると、許氏は解釈する。庾信「楊柳歌」は、河辺の楊柳を見て、梁国の滅亡を思い、かつての栄光が全て空しくなったことを歎くものであり、梁元帝「折楊柳」は先に示したように、巫山・巫峡を旅する人物の望郷の思いを詠んだものである。庾信

「楊柳歌」もある種望郷の思いを詠んだものと言え、故に許氏の解釈に従えば、この二句はいずれも「望郷」の「折楊柳」について述べたことになる。

この許氏の解釈は一つの解釈として首肯できるものだが、詩の構成上、気になるのは第一句と第二句、そして第五句と第六句が、それぞれ女性と男性を対比的に描くのに対して、第三句と第四句がいずれも男性の「楊柳」の曲となってしまうということである。

そこで、もう一つの解釈として考えられるのが、第三句は南の西曲由来の「折楊柳」を指し、第四句は北の梁鼓角横吹曲由来の「折楊柳」の二曲を指すとする解釈である。

先に示したように、『楽府詩集』には鼓吹曲系の「折楊柳」と、横吹曲系の「折楊柳」以外に、巻二十五の横吹曲辞・梁鼓角横吹曲には、「折楊柳歌辞」五曲と「折楊柳枝歌」四曲が、また巻四十九の清商曲辞には「月節折楊柳歌」十三首が収録されている。

「梁鼓角横吹曲」は、五胡十六国時代の「簸邏迴歌」が河北から伝来されたものとされ[20]、清商曲辞の「月節折楊柳歌」は、『楽府詩集』では西曲歌に属する歌である。「簸邏迴歌」は『隋書』音楽志中に北斉王朝が楽制を創革しようとしたときに、もと北魏の「洛下」（洛陽城下）にいた祖珽が、北魏王朝の旧楽について奏上した一文に見える。それに拠れば、北魏・道武帝の天興年間（三九八～四〇三）の初めに宮懸の制度を創製したとき、楽章を欠けていたために、「簸邏迴歌」をまじえて用いたと見える[21]。また清商曲辞の「月節折楊柳歌」は、『楽府詩集』に引く陳・釈智匠の『古今楽録』に拠れば、「西曲歌」三十四曲の一つとされている。「西曲歌」は「・・郢・樊・鄧」の間、すなわち・州一帯の民間歌謡のことであり、その歌辞の多くは宋斉以前のものとされる[22]。

まず「西曲歌」の「月節楊柳歌」は一月から十二月に閏月を加えて、各月ごとに一曲で十三曲あり、その月や季節ごとの景物を描いた後、男性に対する女性の心情を詠むというものである。いま一例として、春三月の「正月歌」「二月歌」「三月歌」を挙げれば、以下のようである。

月節折楊柳歌　正月歌

春風尚蕭條　　春風　尚ほ蕭條たり
去故来如新　　故を去りて来たること新の如し
苦心非一朝　　苦心　一朝に非ず
折楊柳　　折楊柳
愁思満腹中　　愁思　腹中に満つ
歴乱不可数　　歴乱すること　数ふ可からず

月節折楊柳歌　二月歌

翩翩烏入郷　　翩翩たり　烏は郷に入り
道逢双燕飛　　道に双燕の飛ぶに逢ふ
労君看三陽　　君を労して　三陽を看せしむ

折楊柳　　折楊柳
寄言語儂歓　　言を寄せて　儂が歓に語ぐ
尋還不復久　　還ることの復た久しからざるかを尋ぬ

月節折楊柳歌　三月歌
汎舟臨曲池　　舟を汎べて曲池に臨み
仰頭看春花　　頭を仰げて　春花を看
杜鵑緯林啼　　杜鵑は林を緯りて啼く
折楊柳　　折楊柳
双下俱徘徊　　双び下りて俱に徘徊し
我与歓共取　　我と歓と共に取らん

「月節折楊柳歌」は、十三曲のいずれも「折楊柳」という語が、第三句の後にはやし言葉として挿入されており、その前にその月や季節の景物や男女の状況が示され、「折楊柳」ののちに、男性に対する女性の心情を詠むという構成をとる。

「正月歌」は「春風」が訪れて、古いものを除き新しいものをもたらせてくれるようであるのに、女性は苦心を取り除くことができず、憂愁が腹中に満ちることを言う。次の「二月歌」では、春にはねぐらに帰る鳥や仲睦まじく飛ぶつがいの燕を目にするようになる。こんな春の景物をあなたに見てほしい、そして早く帰ってきてほしいと、女性は愛する人に言寄せる。「三月歌」は、舟を浮かべて、春の花を見たり、杜鵑の鳴く声を聞いたりすることを言い、こんな春の良い時だからあなたと一緒に散策し、春の草木を折りとりましょうと、女性が相手に問い掛けるという内容である。

また西曲歌には他に「攀楊枝」という曲があり、これも男性に対する女性の心情を詠む。

攀楊枝
自従別君来　　君に別れて自従り来
不復著綾羅　　復た綾羅を著けず
画眉不注口　　眉を画くも口に注がず
施朱当柰何　　朱を施すこと　当に柰何にすべけん

一方の「梁鼓角横吹曲」の「折楊柳歌辞」五曲と「折楊柳枝歌」四曲は、第二曲以後はそれぞれ異なるものの、次の第一の曲は共通している。

折楊柳歌辞五曲　其一[23]
上馬不捉鞭　　馬に上りて　鞭を捉らず
反折楊柳枝　　反て折る　楊柳の枝
蹀座吹長笛　　蹀くも座るも　長笛を吹き
愁殺行客児　　愁殺す　行客の児

この曲が描くのは、出発の時、馬に乗って旅立とうとする人物が鞭の代わりに楊柳の枝を折る姿であり、旅立つ者の留まる者もともに長笛を吹き、旅立つものはその

愁いに耐えられないことを言うという内容である。

冒頭の二句は「折柳贈別」の早い時期の作とされることもあるが、注目すべきは、留まる者が楊柳を折って贈るのではなく、旅立つ者が楊柳を折っているところである。

「折楊柳歌辞」五曲は、第二の曲においては、男性との別れに耐えられず、鞭となって、いつまでも男性の側にいたいと願う女性の思いを詠み、第三の曲以下は、それぞれの曲の関連は不明だが、従軍の兵士の姿とその思いを描く。[24] 一方の「折楊柳枝歌」四曲は、第二の曲以下は、男性のもとに嫁ぐことを望むも、それがなかなか叶わずに歎く女性の姿を描く。[25]

「折楊柳歌辞」五曲も、「折楊柳枝歌」四曲も全てが男性の「折楊柳」のみを詠むものではないが、「西曲歌」の「月節折楊柳」や「攀楊枝」が、男性を思う女性の心情を描くのに対して、特に「折楊柳歌辞」五曲は、従軍する男性を描くことを主たる内容とする。もし徐陵「折楊柳」の「江陵有旧曲」が西曲歌の「月節折楊柳」を指し、「洛下作新声」が梁鼓角横吹曲の「折楊柳歌辞」若しくは「折楊柳枝歌」を指すのであれば、詩の構成は女性と男性とを交互に提示したものとなる。

「月節折楊柳」については、成立時期も成立地域も詳しいことはわからないが、「西曲歌」の多くは宋斉以前の成立と考えられ、その成立地域は・州一帯の長江中流域である。また「梁鼓角横吹曲」を、梁陳の詩人が、もともと北魏王朝の「簸邏迴歌」であったことまで了解していたかどうかは疑問だが、それがもともと北方から伝来した歌謡であることは、彼らも了解していたと考えても良いであろう。

もし、右の仮定が成り立つのであれば、徐陵が前者を「江陵」の「旧曲」と言い、後者を「洛下」の「新声」とすることは十分に考えられるであろう。[26] もちろん、徐陵の「折楊柳」がそのように解釈可能であったとしても、その認識を梁陳の詩人たち全てが共有していたという訳ではあるまい。

先に掲げた陳後主「折楊柳二首」其一では、前半では女性の「折楊柳」の曲を、後半では従軍の兵士の「折楊柳」の曲と、二つの「折楊柳」を描いているが、その二つの「折楊柳」が西曲歌と梁鼓角横吹曲歌の「折楊柳」であるかどうかは明らかではない。

またこの他に沈約「翫庭柳詩」にも、宮殿の柳を見て悲傷する宮怨の女性と望郷の男性が、すでに対比的に描かれている。

翫庭柳詩　　沈約

軽陰拂建章　軽陰　建章を払ひ
夾道連未央　道を夾みて　未央に連なる
因風結復解　風に因りて　結びて復た解け
霑露柔且長　露に霑ひて　柔らかに且つ長し
楚妃思欲絶　楚妃　思ひ　絶えんと欲し

班女涙成行　　班女　涙　行を成す
遊人未応去　　遊人　未だ去る応からず
為此還故郷　　此が為に故郷に還らん

このように「折楊柳」以外の詩にも、楊柳を見て離別を傷む男女の姿を対比的に描くものが見えることからすれば、梁陳の「折楊柳」以前、又はその前後にこのモチーフは形成され始めていたのであろう。梁陳の「折楊柳」はそのモチーフを借りつつ作辞され、その結果として、男性の立場と女性の立場の二つの「折楊柳」の曲が現れることになったのであろう。[27] 徐陵の「折楊柳」は、その結果としての二つの「折楊柳」の曲の、その源の一つを、梁鼓角横吹曲の「折楊柳」と西曲歌の「折楊柳」に求めたのではなかろうか。

では、「折楊柳」の曲ではなく、楊柳を手折るという行為自体は、梁陳の詩人及びそれ以前の詩人たちに、どのような意味を持つ行為としてイメージされていたのだろうか。次節では、そのことを現存する梁以前の詩の中から探ってみたい。

五　六朝詩における「攀」「折」と「折楊柳」

楊柳を手折るという行為の意味を考えるうえで、まず注目すべきは、『楚辞』を源とする「折物寄遠」のモチーフであろう。[28] 鈴木修次氏は、古詩・古歌の別離の哀愁を主題とする作品には、遠くの人に香草を贈りたいのだが、遠くに離れていてその望みはかなわないという類型的発想があり、その発想は『楚辞』から源を発し、古詩の世界においてやや定型化されていたことを指摘する。[29] 例えば、次の「古詩十九首」の二例は、その典型的な例である。

古詩十九首

涉江采芙蓉　　其六
蘭沢多芳草　　江を渉りて　芙蓉を采る
采之欲遺誰　　蘭沢　芳草多し
所思在遠道　　之を采りて　誰にか遺らんと欲す
還顧望旧郷　　思ふ所は遠道に在り
長路漫浩浩　　還り顧みて　旧郷を望む
同心而離居　　長路　漫として浩浩たり
憂傷以終老　　心を同じくして離れ居む
　　憂ひ傷んで以て老を終へんとす

古詩十九首

庭中有奇樹　　其九
緑葉発華滋　　庭中に奇樹有り
攀條折其栄　　緑葉　華滋を発く
将以遺所思　　條を攀きて其の栄を折り
馨香盈懐袖　　将に以て思ふ所に遺る
路遠莫致之　　馨香　懐袖に盈つれども
此物何足貢　　路遠くして　之を致す莫し
但感別経時　　此の物　何ぞ貢ぐるに足らん
　　但だ別れて時を経るに感ず

其六は異郷に在って遠く故郷を思う男性が芙蓉を取って同心の相手に贈ろうとするものであり、其九は遠く離別する人を思う女性が庭の樹木の枝を折って相手に贈ろうとするものである。このように、「折物寄遠」のモチーフは、男性と女性の両方の立場から詠む詩に見え、その後も魏晋六朝の詩に継承されて、「折麻」「折秋華」「折梅」「折蘭」「折桂」と、折る対象やその表現を変えつつ、くり返し詠まれ続けている。

梁陳の「折楊柳」においても、王瑳の「折楊柳」は詩中に「折柳寄遠」が表現されており、また劉邈の「折楊柳」にも「攀條恨久離」と、「古詩十九首」其九を踏まえて、「折物寄遠」を想起させることは先に述べた通りである。この他にも、陳・顧野王の「芳樹」に「幽山桂葉落、馳道柳條長。折栄疑路遠、用表莫相忘」（幽山　桂葉落ち、馳道柳條長し。栄を折るも路の遠きに疑い、用て相忘るる莫きを表す）とあり、柳條を折って遠きに贈る「折柳寄遠」のモチーフが用いられており、梁陳の「折楊柳」も、『楚辞』から古詩・古歌へ、そして魏晋六朝の詩へと継承される「折物寄遠」の系譜に位置づけることができる。

このような「折物寄遠」の系譜に位置づけられる作品のうち、次の謝朓の詩は、「折物寄遠」のモチーフを踏まえつつ、離別の時に旅立つ者と見送る者が共に草木を折ることが描かれている。

奉和随王殿下詩十六首　其十四　　謝朓

分悲玉瑟断　　分悲　玉瑟断え
別緒金樽傾　　別緒　金樽傾く
風入芳帷散　　風の入りて　芳帷は散じ
缸華蘭殿明　　缸華は蘭殿に明らかなり
想折中園草　　中園の草を折り
共知千里情　　共に千里の情を知らんと想ふ
行雲故郷色　　行雲　故郷の色
贈子一離声　　子に贈る　一たび離るるの声

前半は、別離の悲しみと送別の宴席の様子が描かれ、後半は別離の思いが述べられるが、その後半の第五・六句に「想折中園草、共知千里情」とある。

「千里情」とは、千里遠くに離れた後の思いであり、いま離別の時にあって、「中園」の草を共に折ることによって、旅立つ者と見送る者とが、その「千里情」を共有しようと言うのである。これは「折物寄遠」のモチーフを踏まえて、送別の場における惜別の情を表現しようとしたものであろう。

このように、送別の詩において、草木を共に折るという行為を詩中に詠み込む例は、他に范雲の「送沈記室夜別詩」がある。これは送別の時の行為であるかどうかは定かではないが、これまで行動を共にしてきたことを象徴する行為として、「寒枝」を折るという行為を詠む。

送沈記室夜別詩　　范雲

桂水澄夜氛　桂水　夜氛に澄み
楚山清曉雲　楚山　曉雲に清し
秋風両郷怨　秋風　両郷の怨
秋月千里分　秋月　千里の分
寒枝寧共採　寒枝　寧ぞ共に採らん
霜猿行独聞　霜猿　行く独り聞く
捫蘿忽遺我　蘿を捫りて　忽として我に遺る
折桂方思君　桂を折りて　方に君を思はん

この詩は范雲が沈約との別離に際して作った詩であり、前半は送別の場の景物を描き、今から遠く別れなければならないことの悲しみを詠く。後半は別れた後には一緒に「寒枝」を折ることもできなくなって、独り悲哀を帯びた猿の声を聞くことになり、また互いに「蘿」や「桂」を折りとって、遠く相手のことを思い慕うことになるであろうと言う。

五句の「寒枝寧共採」は、結びの句の別離の後に互いに相手を思って独り草木を折る、すなわち「折物寄遠」と対比され、別離の前に共に過ごした時間や思いを共有していたことを象徴する行為と考えられる。

同様の用例は、梁元帝の「別詩二首」其一にも見える。

別詩二首　其一　　梁元帝

別罷花枝不共攀　別れ罷りては　花枝も共に攀かず
別後書信不相関　別れし後は　書信　相関わらず
欲覓行人寄消息　行人の消息を寄するを覓めんと欲す
依常潮水暝応還　依常に潮水は暝には応に還るべし

この詩は、故郷を離れたまま帰らぬ男性を待つ女性の思いを描いた詩と考えられるが、その第一句に別れてしまってからは、かつてのように「花枝」を共にひき折るようなことも出来なくなってしまったことを言う。これも相手と時間や思いを共有することができなくなったことを「花枝」を共に「攀」くという行為によって象徴しており、ここで「寄遠」の要素は希薄であることが分かるであろう。

振り返って見れば、梁元帝の「折楊柳」にも第三句に「同心且同折」とあり、異郷の地で楊柳を見て、「同心」の人物とともに、別離の前に楊柳を折ったことを思い出して、望郷の思いに駆られるという設定が見られた。或いは、これも離別の時又は離別の前に時間や思いを共有したことを示す行為の例と見ることもできよう。

また南朝民歌風の詩には、春に女性が春の花や香草を摘みとる姿がしばしば描かれており、そのなかには男女が花や草木を折りとって戯れる姿を描くものや、草木を折りとって愛を誓い合う姿を描くものもある。

子夜四時歌・春歌

緑荑帯長路　緑荑　長路に帯び
丹椒重紫・　丹椒　紫・に重ぬ
流吹出郊外　流吹　郊外に出で
共歓弄春英　歓と共に春英を弄ぶ

月節折楊柳歌　三月歌（既引）
…　…
双下俱徘徊　双び下りて俱に徘徊す
我与歓共取　我と歓と共に取らん

月節折楊柳歌　七月歌
織女遊河辺　織女　河辺に遊き
牽牛顧自歎　牽牛　顧みて自ら歎く
一会復周年　一たび会ひては復た年を周る
折楊柳
攬結長命草　長命の草を攬り結び
同心不相負　心の相負むかざるを同にす

また「折柳」の用例では、梁の施栄泰「雑詩」に、女性が柳や蒲を手折って男性に贈ることで好意を伝えるという例も見える。

雑詩　施栄泰
…　…
折柳貽目成　柳を折りて　目成に貽り
挿蒲贈心識　蒲を挿して　心識に贈る
来時嬌未尽　来たる時　嬌は未だ尽きず
還去媚何極　還り去るに　媚何ぞ極まらん

このように草木を手折るという行為は、男女が戯れる様子や女性が男性に愛情を示す行為としても用いられている。先の送別の詩に於ける、時間の共有を象徴する行為としての「折物」は、このような男女の交情を描く南朝民歌系の恋歌のモチーフの影響もあるであろう。

そして、右のような時間の共有を象徴する行為とは別の、また「折物寄遠」とも少し異なった「折物」のモチーフが、魏晋六朝の詩の「攀」「折」の用例を調べていくと見えてくる。

それは、次の阮瑀「駕出北郭門行」のような例である。

駕出北郭門行　阮瑀
駕出北郭門　駕して北郭の門を出づれば
馬樊不肯馳　馬樊まりて馳むを肯んぜず
下車歩踟躕　車を下りて歩みて踟躕し
仰折枯楊枝　仰ぎて枯楊の枝を折る
…　…

この詩は、郭北の門を出発しようとした人物が、丘林で悲しげに泣く声を耳にして、その者に理由を尋ね、彼の語る身の上話―実母を亡くし、継母に酷い仕打ちを受

ける孤児の苦しみ―を知り、それを後世の人に伝えんとした詩である。これは・州に避難しようとした道の途中で子を棄てる母親を目撃する王粲の「七哀詩」と同じような設定であり、当時の過酷な現実に目を向け、それを報道する詩である。

引用したのは、その冒頭四句であり、馬車にのって北郭の門から出発しようとすると、馬がその歩みを留めて前に進まなくなり、仕方なく車を下りてしばらく辺りを歩き回り、枯れた楊柳の枝を手折る場面である。楊柳を手折る人物を描く早い時期の用例でもあり、『初学記』巻二八は「枯楊枝」を「楊柳枝」に作る。

この「枯楊枝」或いは「楊柳枝」を手折る行為は、馬が進まないので為すこともなく、無聊を託つ行為を示すものであり、この人物が何らかの憂愁を抱えているかどうかは必ずしも明確ではない。しかし、次の劉宋・鮑照の詩では、憂愁を抱えた人物がその憂愁を解消しようとするかのように、草木の枝を「攀」く姿が描かれている。

代陽春登・山行　鮑照

…　…

花木乱平原　花木　平原を乱し
桑柘盈平疇　桑柘　平疇に盈つ
攀條弄紫莖　條を攀きて　紫莖を弄び
藉露折芳柔　露を藉きて　芳柔を折る
遇物雖成趣　遇ふ物は趣を成すと雖も
念者不解憂　念ふ者は憂ひを解かず
且共傾春酒　且く共に春酒を傾け
長歌登山丘　長歌して山丘に登らん

贈故人馬子喬詩六首　其五　鮑照

…　…

憑楹観皓露　楹に憑りて　皓露を観
灑酒盪憂顔　酒を灑ぎて　憂顔を盪ふ
永念平生意　永く念ふ　平生の意
窮光不忍還　窮光　還すに忍びず
淹留徒攀桂　淹留して徒らに桂を攀き
延佇空結蘭　延佇して空しく蘭を結ぶ

右の二例では、いずれも憂愁を抱える人物が、その憂愁を解消しようとするかのように草木を「攀」いている。「代陽春登・山行」の「攀條」は先に引いた「古詩十九首」其九に基づく語だが、ここでは「寄遠」の要素は希薄で、「念者」のやるせない心情を表現した行為のように読める。また「贈故人馬子喬詩六首」其五の「淹留徒攀桂、延佇空結蘭」は、それぞれ『楚辞』「招隠士」と『楚辞』「離騒」を踏まえた表現であり、時の再び返らないことを歎きつつ、辺りを徘徊しまた立ち尽くし、桂や蘭をひき結ぶ人物の姿を描く。

この「贈故人馬子喬詩六首」が踏まえる『楚辞』「招隠士」は、山中に留まる隠士を招き求めるものであり、「攀

援桂枝兮聊淹留」（桂枝を攀援し聊か淹留す）と、山中に留まって桂枝をひき折る隠士の姿を描く句が、前半と後半に二度くり返されている。王逸は「攀援桂枝」について、「配託香木、誓同志也」（香木を配託して、志を同じくするを誓ふなり）と注し、「聊淹留」には、「踟蹰低佪、待明時也」（踟蹰低佪して、明時を待つなり）と注する。つまり、この隠士は桂の枝をひき折ることによって志を変えないことを誓い、太平の世の到来を待って山中に留まっていると王逸は解釈するのである。

また『楚辞』「離騒」では、四方を遊覧するも望むものは得られず、夕暮れを迎えて立ち尽くす人物の姿を、「時曖曖其将罷兮、結幽蘭而延佇」（時は曖曖として其れ将に罷まらんとす、幽蘭を結んで延佇す）と描き出している。ここで王逸は「言時世昏昧、無有明君、周行罷極、不遇賢士、故結芳草、長立有還意也」（言ふこころは時世昏昧にして、明君有る無し、周行罷極するも、賢士に遇はず、故に芳草を結び、長く立ちて還る意有るなり）と注する。王逸は、幽蘭を結ぶという行為を、時世の昏迷を歎き、太平の世の訪れを願う人物の行為と解釈するのである。

鮑照の「贈故人馬子喬詩六首」其五は、この『楚辞』「招隠士」及び「離騒」を踏まえて、現実に対する不平を示す思いを、結びの二句に託しているのであろう。そして、それは「代陽春登・山行」の「攀條」「折芳柔」という行為についても同じように解釈することができる。更に言えば、阮瑀「駕出北郭門行」の「仰折枯楊枝」にも、不幸な孤児を生み出してしまう現実の昏迷に対する詩人の不平が託されていると読むこともできよう。

そして梁陳の「折楊柳」に頻用される「攀折」という語も、『楚辞』「招隠士」の「攀援桂枝兮聊淹留」に基づく語と考えられる。王逸の注は、「攀援」を一本に「攀折」に作ると注し、『楚辞』「招隠士」を模擬した梁の范縝の「擬招隠士」には「攀折芳條兮聊停佇」（芳條を攀折し聊か停佇す）という句が見える。

「攀折」という語は、管見の及ぶ限りでは、梁以前の詩には用例が見られず、梁に至って突如用いられるようになる語である。その用例は、梁・范縝の「擬招隠士」以外には、梁陳の「折楊柳」の四例と陳・孫祖登「詠柳詩」と賀循「賦得庭中有奇樹詩」のみに見られる。

梁陳の「折楊柳」では、梁簡文帝「折楊柳」に「攀折上春時」と「攀折」の語が初めて見え、陳の後主「折楊柳二首」其一に「聊持暫攀折」、岑之敬「折楊柳」に「曲成攀折処」、江総「折楊柳」に「春樹聊攀折」とあった。これらはいずれも望郷の思いを抱く従軍の兵士が楊柳を手折るという例である。

これに対して、王瑳「折楊柳」の「攀折思為贈」と、賀循「賦得庭中有奇樹詩」の「攀折会取贈佳期」は閨怨の女性の行為であり、陳・孫祖登「詠柳詩」は従軍の兵士と閨怨の女性の両方の行為として解釈できる。

現実に対する不平を示す行為としての「折物」は、魏晋六朝期の詩の用例は少なく、魏晋六朝期に広く用いら

れたモチーフではなかったようである。しかし、梁陳の「折楊柳」の「攀折」の多くが、従軍の兵士の行為として多く用いられているのは、『楚辞』「招隠士」や「離騒」に源を発する、現実に対する不平を示す「攀折」のモチーフからも、その発想を借りて来ているのではなかろうか。

六　小結　―六朝以前の「折楊柳」―

本稿では、梁陳の横吹曲「折楊柳」を中心として、梁陳の詩人たちが「折楊柳」という曲をどのように描いているのか、そしてそこから「折楊柳」を彼らがどのような曲とイメージしていたのかを読みとってきた。更に六朝詩以前の「攀」「折」の用例を調べることによって、六朝以前の詩人たちが、楊柳を折るという行為をどのようにイメージしていたのかを読みとろうとした。

「折楊柳」と言えば、現在の我々は「折柳贈別」の習俗をまず想起するけれども、六朝以前の「折楊柳」やそれに類する詩には、「折柳贈別」の習俗との明確な関連は見出せない。本稿では、「折柳贈別」の習俗を前提とする読みをひとまず棚上げとして、梁陳の「折楊柳」を生み出した文脈を、六朝以前の詩の中からできる限り読みとろうとした。

それは、六朝以前の詩人たちの認識する世界を、現在の残されたテキスト群から読みとり、その世界の多様な有り様を読みとろうとする試みであったが、或いは稿者の思い込みや読み誤りも有るかもしれない。また結果としての梁陳の「折楊柳」へと回収しようとするあまり、稿者が読み落としていることもあるかもしれない。諸賢のご批正を仰いだ上で、今後の更なる検討を期したい。

隋唐以後の「折楊柳」については、本稿では取りあげることはできなかったが、現在までの稿者の調査によれば、初唐期の「折楊柳」は「折柳寄遠」が主流となり、盛唐期から中唐期にかけて、再び「折楊柳」の多様な姿が描かれるようになってゆく。この隋唐以後の「折楊柳」に見える表現と認識の変容については、本稿の結論を踏まえ、また稿を改めて論じたい。

注

(1) 増田清秀氏『楽府の歴史的研究』(創文社・一九七五) 二四六・二四七頁参照。清の孫星衍・荘達吉校定『三輔黄図』(平津館叢書本所収) の「跨水作橋」の下には「下十一字、後人妄加。今削去」と割注があり、「漢人送客至此橋折柳贈別」の十一字を削除する。また宋・程大昌『雍録』は、当時伝来していた『三輔黄図』が顔師古の語を引いたり、肅宗の時の地名を用いたりしていることから、唐人によって増補されていることを指摘し、陳直『三輔黄図校証』は、『三輔黄図』の原書は後漢末、三国初期に成立したものの、現行本は中唐以後の人の作であるとする。これらの指摘により、現行の『三輔黄図』は中唐以後の人が増補した部分があると現在では考えられている。

(2) 許曼麗氏『楊柳續考—信仰から別離の象徴へ—』(『藝文研究』五三・一九八八)。

(3) 向島成美氏『漢詩のことば』(大修館書店・一九九八)は、「折柳贈別」は「北朝の歌謡から現れ出し、南朝梁・陳の詩人たちによって定着させられたと思われる」とする(一二三頁)。

(4) 戴明璽氏「折柳"的歴史演変、文化意蘊和宗教情感」(『北京科技大学学報(社会科学版)』第十八巻第三期・二〇〇二)。また李暉「唐代"折柳"風俗考略」(『中南民族学学院学報(哲学社会科学版)』一九九八年第一期 一九九八)も、唐代には「折柳」の詩詞が多く、それは「折柳贈別」ばかりではなく、「折柳寄遠」の作も有ることを指摘する。

(5) 松浦友久氏編『漢詩の事典』(大修館書店・一九九九)では、「灞橋折柳」のイメージが定着したのは中晩唐期とするが(「Ⅲ 名詩のふるさと(詩跡)」「灞橋」の項・三三四〜三三七頁)、そもそも「折柳贈別」のイメージの定着そのものが中晩唐期と考えられる。

(6)『楽府詩集』巻二二は柳惲の作とするが、『玉台新詠』巻七及び『文苑英華』巻二百八は、これを梁簡文帝の作とする。

(7) 王宜瑗氏「梁陳における征戦詩の新たな変化—横吹曲を中心に—」(『中国學志』剥号・二〇〇八)。ただし、王氏は「折楊柳」の曲は「しばしば思婦の立場から辺境の征夫を思うものとなっている」(四二頁)とするが、後述するように梁陳の「折楊柳」はむしろ征夫の立場を詠むものが多い。また王氏は征夫の立場の詩を「征怨」と呼ぶが、「折楊柳」の場合、梁元帝の「折楊柳」が征夫というよりは、旅人を詠むと考えられるため、本稿では男性の立場からのものを「望郷」、女性の立場からのものを「閨怨」と呼ぶこととする。

(8) 増田氏前掲書に「すなわち「同心」とは、この句の場合、作中の人物つまり巫峽に遊ぶ士が、もと故郷で親しくした者、次の句中の「故人」であり、また「同折」とは、その士が故郷を去るのとき、親しき者と楊柳を手折った意であろう」(二五〇頁)とある。

(9) ここで「故人」は「故郷」を「懐」う人物であり、第八句の「遊子」と同一人物と解した。ただし「故人」という語は、古い友人や思い慕う人に用いる呼称であり、或いはここで詩人の視点が妻に寄り添っているために、「故人」という語を使用しているのかもしれない。

(10) 応貞「晋武帝華林園集詩」(『文選』巻二〇)に「幽人肆険、遠国忘遐(幽人は険しきを肆(す)て、遠国は遐(とほ)きを忘る)」とあり、李善注に「毛萇詩伝曰、幽遠也」とある。

(11)「曲成」を『楽府詩集』『文苑英華』は「曲城」に作る。「曲城」は「曲成」とも言い、漢の将軍蟲達が侯に封じられたところとして有名な地名である。六朝以前の詩の「曲城」の用例はいずれも漢の蟲達を指しており、また「曲城」は現在の山東省付近で、従軍の兵士が居る場所としても相応しくない。そこで、「曲成」は楽曲が成るの意で解した。

(12) 鮑照「擬行路難十八首」其一四に「君不見少壮従軍去、白首流離不得還。故郷窅窅日夜隔、音塵断絶阻河関」(君見ずや 少壮にして軍に従ひて去り、白首流離して 還るを得

ざるを。故郷　窅窅として　日夜隔(へだ)たり、音塵　断絶して河関に阻(はば)まる）とある。

(13) 蘇武「詩四首」其二（『文選』巻二九）に「胡馬失其群、思心常依依」（胡馬　其の群を失ひ、思心　常に依依たり）とあり、李善は「依依、思恋之貌也」（依依は、思恋の貌なり）と注す。

(14) 同氏前掲書・二二八頁。

(15) 「陌上」が男女交会の場であることを示す例は、例えば、蕭子顕「春別詩」に「翻鶯度燕双比翼、楊柳千條共一色。但看陌上携手帰、誰能対此空相憶」（翻鶯度燕　比翼を双べ、楊柳千條　一色を共にす。但だ陌上に手を携へて帰るを看る、誰か能く此に対して空しく相憶はん）とある。

(16) 『南史』陳暄伝に「後主之在東宮、引為学士。及即位、遷通直散騎常侍、与義陽王叔達・尚書孔範・度支尚書袁權・侍中王瑳・金紫光禄大夫陳褒・御史中丞沈瓘・散騎常侍王儀等恒入禁中陪侍游宴、謂為狎客」とある。

(17) 『世説新語』政事の劉孝標注に引く「晋陽秋」に見える。

(18) 魏文帝「柳賦序」（『藝文類聚』巻八九）に見える。

(19) 許逸民氏『徐陵集校箋』（中華書局・二〇〇八）。また許氏は、この詩は徐陵が梁簡文帝の東宮時代に、簡文帝「折楊柳」に奉和した可能性があると指摘し、また『藝文類聚』巻八九では、この詩を「湘東王折楊柳詩」と題することを挙げる。

(20) 増田清秀氏前掲書・二一九頁。また『旧唐書』音楽志二に「按今大角、此即後魏世所謂簸邏迴者是也、其曲亦多可汗之辞。北虜之俗、呼主為可汗。吐谷渾又慕容別種、知此歌是燕・魏之際鮮卑歌、歌辞虜音、竟不可曉。」とある。

(21) 『隋書』音楽志中に「斉神武霸跡肇創、遷都于鄴、猶曰人臣、故咸遵魏典。……其後将有創革、尚薬典御祖珽自言、旧在洛下、曉知旧楽。上書曰、……天興初、吏部郎鄧彦海、奏上廟楽、創制宮懸、而鍾管不備。楽章既闕、雑以簸邏迴歌」とある。『隋書』音楽志訳注稿（二）（『中国学研究論集』二〇・二〇〇八・八九頁及び九二頁の注（12））参照。また韓寧氏は、「簸邏迴歌」は楽章の名称ではなく、「簸邏迴」（大角）で演奏される楽曲の代称である可能性があると指摘する。そして、その楽章は『魏書』楽志に「掖庭中歌真人代歌、上叙祖宗開基所由、下及君臣廃興之跡、凡一百五十章」とある北魏の「真人代歌」であり、南朝に伝来した梁鼓角横吹曲の多くはこの「真人代歌」中の楽章ではなかったかと言う（『鼓吹横吹曲研究』北京大学出版社・二〇〇九・一六三～一六七頁）。

(22) 陳・釈智匠の『古今楽録』は、「石城楽」を初めとする西曲十五曲の舞曲を「旧舞」と言い、増田清秀氏はこの「旧」は、宋・斉の時代のものと言う（増田氏前掲書一四一頁）。但し、この西曲十五曲のうちに「月節折楊柳歌」は含まれていない。

(23) 「折楊柳枝歌」は第二句の「折」を「拗」に、第三句の「蹀座」を「下馬」に作る。

(24) 「折楊柳歌辞」五曲の第二曲以下の原文は次の通りである。腹中愁不楽、願作郎馬鞭。出入攫郎臂、蹀座郎膝辺。

放馬両泉沢、忘不著連羈。擔鞍逐馬走、何見得馬騎。
遙看孟津河、楊柳鬱婆娑。我是虜家児、不解漢児歌。
健児須快馬、快馬須健児。・跋黄塵下、然後別雄雌。

(25)「折楊柳枝歌」四曲の第二曲以下の原文は次の通りである。

門前一株棗　歳歳不知老。阿婆不嫁女、那得孫児抱。
敕敕何力力、女子臨窓織。不聞機杼声、只聞女歎息。
問女何所思、問女何所憶。阿婆許嫁女、今年無消息。

(26) 劉懐栄氏は、北朝の民歌を漢語に翻訳した梁鼓角横吹曲が南朝側に伝来したのは、北魏の孝文帝が洛陽に遷都して胡語の使用を禁止した太和十九年(四九五)以後のことであり、その楽章成立から南伝までの過程を考慮すれば、その南伝は早くとも梁初期以後のことであろうとする(「漢魏以来北方鼓吹楽横吹楽及南伝考論」(『黄鍾　武漢音楽学院学報』二〇〇九年第一期・二〇〇九)。もし劉氏の仮説が妥当であれば、徐陵が西曲歌系の「月節折楊柳」に対して、梁鼓角横吹曲の「折楊柳」を「新声」と呼ぶ可能性は十分にあるだろう。

(27) 梁陳の「折楊柳」のうち、残る張正見「折楊柳」は、宮殿内(長楊宮)の楊柳を詠む、所謂詠物詩のような内容で、他の梁陳の「折楊柳」と異なっている。本稿では、この詩を「折楊柳」の系譜に位置づけることができなかったが、左に本文と書き下し文を示しておく。

折楊柳　　張正見

楊柳半垂空　　楊柳　半ば空に垂れ
裊裊上春中　　裊裊たり　上春の中
枝疏董澤箭　　枝は疏なり　董澤の箭
葉碎楚臣弓　　葉は砕く　楚臣の弓
色映長河水　　色は長河の水に映え
花飛高樹風　　花は高樹の風に飛ぶ
莫言限宮掖　　言ふ莫かれ　宮掖に限られ
不閉長楊宮　　長楊の宮に閉ざさると

(28) 戴氏前掲論文も「折楊柳」が、「折麻」「折梅」などの「折物寄遠」の伝統を継承するものであることを指摘する(八一頁)。

(29) 鈴木修次氏『漢魏詩の研究』(大修館書店・一九六七)四四六〜四五〇頁)。

(30) 謝霊運「従斤竹澗越嶺溪行」に「想見山阿人、薜蘿若在眼。握蘭勤徒結、折麻心莫展」、聞人倩「春日詩」に「人行今不返、何労空折麻」。

(31) 曹植「離友詩」三首其二に「臨渌水兮登崇基、折秋華兮采靈芝。尋永帰兮贈所思、感離隔兮会無期」。

(32)「西州曲」に「憶梅下西洲、折梅寄江北」。

(33) 湯惠休「楊花曲三首」其一に「掩涕守春心、折蘭還自遺」。

(34) 范雲「別詩」に「折桂衡山北、摘蘭沅水東」。

(35)『藝文類聚』巻三二は「衣」に作るが、詩紀注の指摘に従い、「依」に改めた。